

研究課題	社会に開かれたカリキュラムの実現を目指した探究活動の研究
副題	～課題研究を通じた主体的・対話的で深い学びの促進～
キーワード	総合的な学習の時間・探究活動・社会に開かれたカリキュラム・高大接続
学校名	福岡県立春日高等学校
所在地	〒816-0811 福岡県春日市春日公園5丁目17番
ホームページ アドレス	http://kasuga.fku.ed.jp/

1. 研究の背景

本校は、校訓「自主 創造」のもと、徳育・知育・体育の調和を図り、豊かな人格を涵養するとともに、自ら学び、個性を伸ばし、心身ともにたくましく、社会の発展に寄与する人間を育成することを教育目標としている。約半数の生徒が国公立大学へ合格する進学校であるが、学力調査や授業アンケートの結果などから、知識の活用や自主的に学ぶ態度の育成が課題となっている。この課題を克服し、本校の教育目標を達成するためには、生徒が高い志を持ち、知的好奇心を刺激できるような学習環境を整備することが急務であり、学校での学びと社会とのつながりを意識できる教育活動の取り組みが必要である。具体的には、「総合的な学習の時間」、「HR活動」、「学校行事」、「授業」など学校教育全体を通じて、全校生徒に課題研究を課し、生徒たちのアウトプットの場を確保しながら、主体的・対話的で深い学びを促進することが有効であると考えます。

現在進展する高大接続改革に対応すべく、「学校グランドデザイン」や「学校ループリック」をワークショップ形式の職員研修や会議を通じて作成し、次年度より施行予定である。また、本校が位置する春日市の行政機関、近隣の九州大学大学院を中心とした大学機関、地域の小中学校と連携体制を構築し、社会に開かれたカリキュラムの実現に向けた準備を行っている。

29年度、本校は31クラス、1200名以上（30年度は32クラス約1300名）の生徒が在籍しているが、日常的教育活動に利用できるICT機器は、持ち運び用のプロジェクター・スクリーンが3セット、書画カメラが2台、電子黒板が2台（30年度1台追加）であり、日常的にICTが活用できる環境とはいえない。3年間を通じた系統的な課題研究を通して探究活動を行う上で、環境整備は急務である。本研究を行うことは、本校が進めている高大接続改革への対応・社会に開かれたカリキュラムの実現と本校の教育課題の克服を同時に進めるために、大きな効果を生むことが期待できる。

2. 研究の目的

全教職員が生徒の課題研究の指導を通じて、主体的・対話的で深い学びを促進し、本校生徒の実態に応じた探究活動の研究に携わり、教科横断的な社会に開かれたカリキュラムの実現を目指し、各教科、各学年の取り組みを定期的に共有しながら研究を進めていくことを目的とする。

3. 研究の経過

本校では、今年度から総合的な学習の時間を大幅に見直し、第2学年の「課題研究」を中心とした、高大接続や地域との連携を行い、社会に開かれたカリキュラムを目指し、教科横断的な取り組みを行った。表1に1, 2年生の取り組みの経過を示す。

表1 年間の研究経過

月 日	曜	取組内容：1年	評価のための記録
4月25日	水	アドミッションポリシー調べ①	ループリック（自己評価）
5月1日	火	アドミッションポリシー調べ②	ループリック（自己評価・相互評価）
5月7日	月	切抜き新聞づくり①	ループリック（自己評価）
5月21日	月	切抜き新聞づくり②③	ループリック（自己評価・相互評価）
6月5日	火	SDG s Research①	ループリック（自己評価）
6月6日	水	SDG s Research②	ループリック（自己評価）
6月11日	月	SDG s Research③	ループリック（自己評価）
7月6日	金	社会人講演会	ループリック（自己評価）
7月9日	月	SDG s クラス発表	ループリック（自己評価・相互評価）
9月14日	金	大学説明会・出前講義	ループリック（自己評価）
10月15日	月	大学研究①	ループリック（自己評価）
10月22日	月	大学研究②	ループリック（自己評価）
10月29日	月	大学研究③	ループリック（自己評価）
10月31日	水	大学研究④	ループリック（自己評価）
11月5日	月	大学研究⑤	ループリック（自己評価）
11月12日	月	大学研究⑥⑦	ループリック（自己評価・相互評価）
11月28日	水	ディベート①	ループリック（自己評価）
12月3日	月	ディベート②	ループリック（自己評価）
12月5日	水	ディベート③	ループリック（自己評価）
12月10日	月	ディベート④	ループリック（自己評価）
12月17日	月	ディベート⑤	ループリック（自己評価）
1月16日	水	ディベート⑥	ループリック（自己評価）
1月21日	月	ディベート⑦⑧	ループリック（相互評価）
1月28日	月	ディベートマッチ	ループリック（相互評価）
2月20日	水	1年間の振り返り	
月 日	曜	取組内容：2年	評価のための記録
5月1日	火	SDG s Research①	ループリック（自己評価）
5月7日	月	SDG s Research②	ループリック（自己評価）
6月6日	水	SDG s Research③	ループリック（自己評価）
7月6日	金	社会人講演会	ループリック（自己評価）
7月9日	月	課題研究①	ループリック（自己評価）
		課題研究②	ループリック（自己評価）
9月14日	金	大学説明会・出前講義	ループリック（自己評価）
10月15日	月	課題研究③	ループリック（自己評価）
10月22日	月	課題研究④	ループリック（自己評価）
11月5日	月	課題研究⑤～⑦	ループリック（自己評価・相互評価）
11月12日	月	課題研究中間発表	ループリック（相互評価）
11月28日	水	課題研究⑧	ループリック（自己評価）
12月3日	月	課題研究⑨	ループリック（自己評価）
12月5日	水	英語ディベート①	ループリック（自己評価）
12月10日	月	英語ディベート②	ループリック（自己評価）
12月12日	水	英語ディベート③	ループリック（自己評価）
12月17日	月	英語ディベート④⑤	ループリック（自己評価・相互評価）
1月16日	水	英語ディベートマッチ	ループリック（相互評価）
2月20日	水	志望理由書	ループリック（自己評価）
2月22日	金	進路講演会	
3月8日	金	課題研究発表会	ループリック（相互評価）

4. 代表的な実践

全教職員が生徒の課題研究の指導を通じて、主体的・対話的で深い学びを促進し、本校生徒の実態に応じた探究活動の研究に携わり、教科横断的な社会に開かれたカリキュラムの実現を目指して以下の実践を行った。

1年次に社会問題と学問と社会のつながりについて探究活動を行った。2年次に約440名の生徒が11の講座(本校ではItemと呼んでおり、表2に示す。)に分かれ、4人1班で、キーワードに関連する身の回りの疑問や謎、社会が抱える課題についてテーマを決め、具体的な「課題設定→仮説→検証→結果→報告→課題の再設定」の探究のプロセスを生徒たちで完結させる「課題研究」を行った。課題研究では中間発表と最終発表の2回の発表会を行った。中間発表では4コマプレゼン、最終発表会では口頭発表(プレゼンテーション)とポスター発表を行った。(図1-I~VI)

表2 講座割

Item 番号	キーワード
01	『食』
02	『健康』
03	『育てる』
04	『水』
05	『エネルギー』
06	『働く・つくる・つかう』
07	『住む』
08	『気候』
09	『陸』
10	『海』
11	『コミュニケーション』

研究テーマ

異種間コミュニケーションは可能か

テーマ設定理由

- 〇コミュニケーション手段の異なる動物は互いにコミュニケーションがとれるのか気になったから。
- 1. コミュニケーション手段
 - 人→言葉・表情
 - イルカ→超音波
 - 犬→におい
 - ハチ→複雑なダンス etc.

図1-I

仮説

異種間コミュニケーションは... できる

<根拠>

- ・犬、猫、鳥、イルカなどの動物は知能が高いから。
- ・これらの動物と暮らしていると、「自分の気持ちを分かってくれている」と感じることもあるから。
- ・言語を使うことができなくても、しぐさや音などを使うことで、何かしらの意思を双方が読み取ろうとするから。

図1-II

検証 イルカと人間のコミュニケーション

<一方的な意思疎通>

人間 $\xrightarrow{\text{言語}}$ イルカ

⇒ 成立しない

なぜか?
言語を用いたコミュニケーションは人間特有のものである。
↓
でも、言語を理解できないイルカに対して一方的に意思疎通を図っているから。

<相互的な意思疎通>

人間 $\xleftrightarrow{\text{声・表情}} \xleftrightarrow{\text{動き・声}}$ イルカ

⇒ 成立する

なぜか?
共通言語がない。
↓
なので、イルカと対等な立場に立ち、「五感」を使った、相互的な意思疎通を図っているから。

図1-III

結果

コミュニケーション手段が違っても、コミュニケーションはとれる! 対話のあり方は様々であるが、「異種間コミュニケーション」は、人の感覚や言語能力、認識の範囲を一方的に相手に押しつけるのではなく、非言語コミュニケーションを用いることにより、できる。異種間コミュニケーションをするにあたって大切なのは、人間が忠誠心や思いやりなどをもちことだ。

新たな疑問

同種間のコミュニケーションでは、言語を用いるのと、非言語コミュニケーションを用いるのは、どちらの方が重要になっているのか?

図1-IV



図1－V



図1－VI

各教科、各学年の取り組みを定期的に共有しながら研究を進めていくために下記の4つの活動も行った。

○校内研修会の開催

第2学年の職員・生徒を対象として、現在連携中である九州大学理工学府の教授・大学院生を講師として招聘し、「課題研究の進め方」や「ICT 機器を活用した探究活動」に関する校内研修会を行った。

○研究発表会の開催

課題研究の中間発表会では、九州大学理工学府の教授・大学院生、日本福祉大学の影戸教授を講師として招聘し、「研究内容が社会の発展に寄与するものか」等の研究内容と社会のつながりについて協議し、研究の方向性を明確にするアドバイスをいただいた。最終発表会では、九州大学理工学府の教授・大学院生を審査員として招き、教育成果の検証を行うとともに、助言を受け、その成果を今後の研究や学びに活用している。



図3 課題研究中間発表講評

○ディベートの実践

課題研究を進めるうえで必要となる論理的な思考力育成のために、1年次に日本語でのディベート、2年次に英語ディベートの指導を行った。ディベート指導は、国語科・英語科の教員を中心に1・2学年すべての教員で行った。

○ICT 機器等を活用した授業実践

今年度作成した、「学校グランドデザイン」を反映した「学校ルーブリック」を用いた授業を実践し、ICT 機器を活用した研究授業を通じて、指導力や評価方法の改善・向上を研究授業だけではなく、日々の授業を通して行った。また、生徒に身につけさせたい能力の共有化を図り、課題研究を円滑に行うための指導内容や、単元の配列についての研究を行っている途中である。



図4 ディベート

表4 春日高校ルーブリック

春日高校ルーブリック(学びに向かう力・人間性)のルーブリック							
主体的・協働的態度		評価規準	評価基準				
			S(5)	A(4)	B(3)	C(2)	D(1)
対人	統率力 目標や課題を設定し、場を読み、組織を動かす(リーダーシップ)	情報を収集し、客観的に分析することで、状況に応じて目標や課題を設定することができる。その達成に向けて自分の意見を主張しながら、周囲との調整を図り、集団の合意へと導くことができる。					
	協働力 他者との豊かな関係を築き、目標達成や課題解決に向けて協力的に物事を進める(フォロワーシップ)	集団における自己の役割を理解した上で、他者と意見を交わし合い、また、助け合ったり、情報を共有したりして、集団全体の向上や目標達成、課題解決に貢献することができる。					
対自己	行動持続力 自主的に行動し、よい行動を習慣づけ、自己の適性と能力を伸長させようとする(自主)	自己や物事を分析し、明確な目標を設定し、その達成に向けて粘り強く取り組むことができる。自己の適性や能力の伸長のために、よい行動を創出し習慣化することができる。					
	自己創出力 志、チャレンジ精神、向学心を持ち、気持ちの揺れを制御しながら、課題を解決しようとする(創造)	自己向上のために、自己の長所・短所を理解しながら、課題解決にむけて自己の能力を発揮することができる。成功体験を積み重ねながら、新たな機会をうまく捉えて挑戦することができる。					
対社会	社会参画力 世紀(新しい時代)を拓き社会の発展に寄与する(自主・創造の具現化)	日常生活や社会の中に問題を見つけ出し、自分の知識や経験を総合的に活用して、自己や集団(社会)にとってよりよい解決策を導くことができる。またその結果、方策など発信することで他の助けになったり、他の事例に適切に応用することができる。					

S～Dに各教科・科目や総合的な学習の時間の評価基準を作成し、このルーブリックをもとに、生徒は自己評価、教員は生徒の評価を行う。

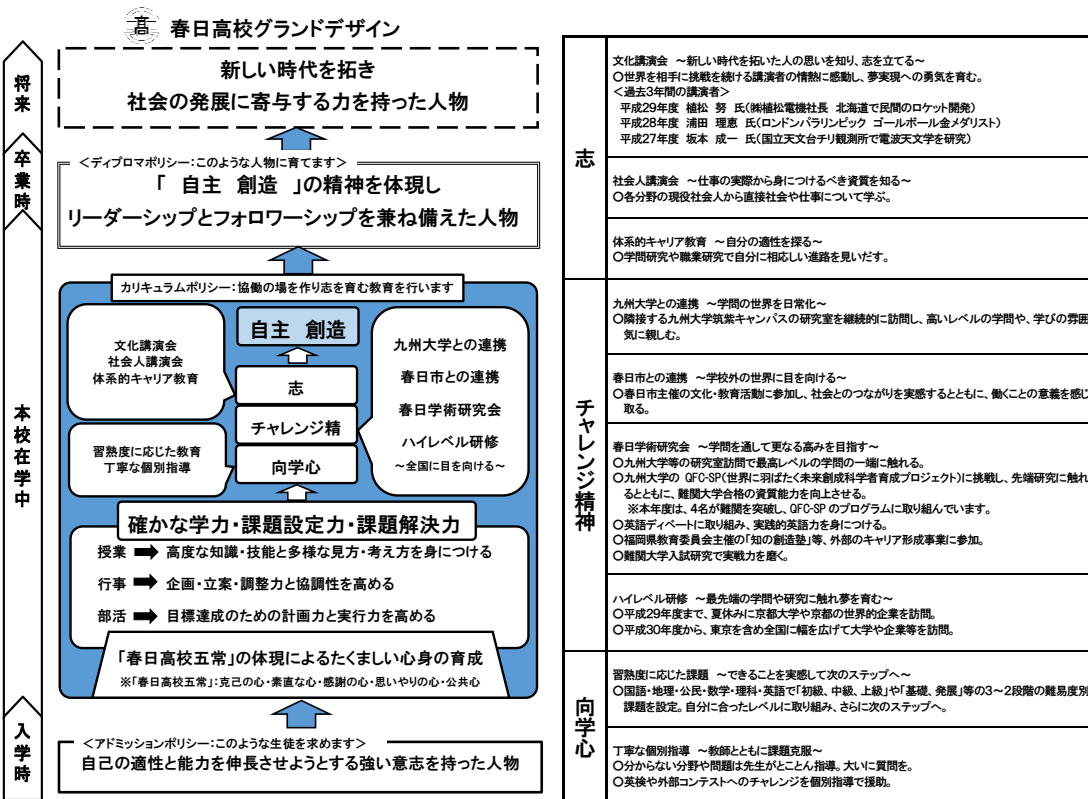


図5 グランドデザイン

5. 研究の成果

成果目標であった以下の3点について報告する。

○知識の活用(アウトプット)ができる生徒の育成(図6)

総合的な学習の時間における、グループディスカッションやプレゼンテーション等の様々な活動により、学んだ知識を他者に伝えようとする態度が取組前より向上している（AよりSが増加）。

○自主的・主体的に学ぶ態度や意欲の向上（図7）

アンケートの結果、1年間で課題研究を一番頑張ったと言っている生徒が一番多く、班で協力して主体的・協動的に研究を行うことができています。

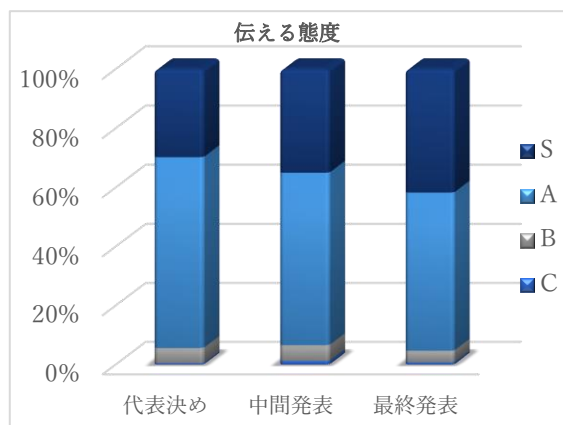


図6

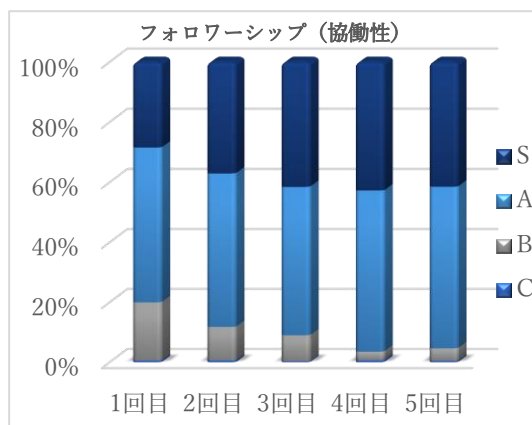


図7

○自己肯定感や自己有用感の向上（図8・図9）

課題研究では毎回ループリックによる自己評価と発表会では相互評価を取り入れた。結果としては、年度当初より自己肯定感が向上した生徒が微増した。また、他者を共感する態度（聞く態度）も向上した生徒が多くいた。さらに、ボランティア・インターンシップ、学習支援を通じて、初めは自信なく参加していた生徒たちが2回3回と校外活動を重ねるごとに自信をつけていき、積極的に校外活動に参加する生徒が昨年度より増加した。

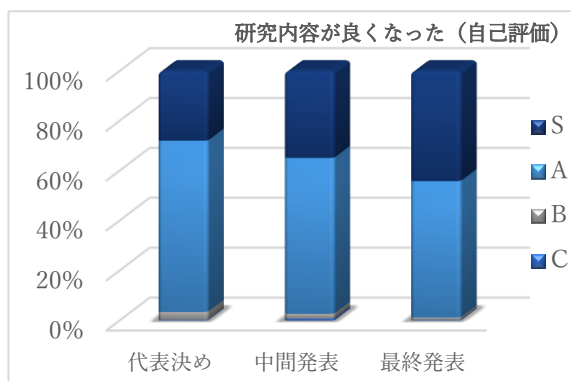


図8

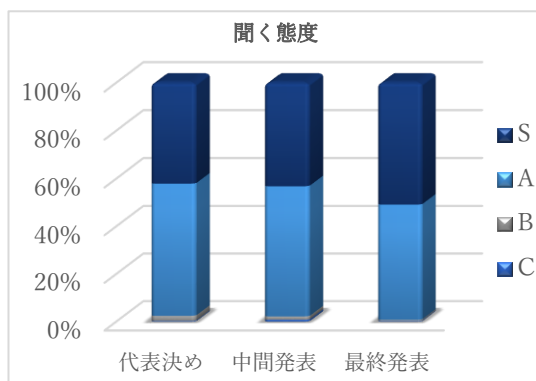


図9

6. 今後の課題・展望

○自己評価が多かったため、次年度は相互評価と自己評価を併用していくことが必要である。

○外部との連携は、九州大学理工学府と春日市がほとんどのため、新規の連携相手を開拓していくことが急務である。

○「課題研究」では、教員間の指導における差がみられ、生徒のテーマの7割程度が研究とは程遠い内容かつ「問い」に対する「答え」がありきの内容のものに留まったことが課題である。

○来年度からは、総合的な探究の時間が始まるため、年度初めからしっかりと教員間で「探究」について研修

していくことと、教員間での意思統一を図ることが重要な課題である。

○課題研究を進めるうえで、プレゼンテーションはとても重要であるが、I C Tを使用する環境がまだまだ不十分であるため、電子黒板や電子黒板機能付きプロジェクタ、タブレット端末を購入し、日々の授業から生徒・教員がともにI C Tを使いこなせる環境を整えることが最重要課題である。

これらの課題を乗り越えることで、課題研究のみならず、普段の授業を通じて主体的・対話的で深い学びの促進ができ、社会に開かれたカリキュラムの実現を目指した探究活動を行うことで、課題探究的な学びを持続可能にして日常化することが今後の展望である。

7. おわりに

パナソニック教育財団をはじめ、日本福祉大学教授影戸誠先生、九州大学理工学府教授・大学院生、春日市議会や春日市教育委員会など、多くの支援やアドバイスをいただくことで本研究を行うことができたことこの場を借りて深く御礼申し上げる。